51 号　2025 年 8 月 15 日発行

SIGNIS　JAPAN　ニュースレター
タリタ・クム！　起きなさい！

発行：SIGNIS JAPAN（カトリックメディア協議会）
代表：土屋 至
発行所：〒107-0052　東京都港区赤坂 8-12-42
聖パウロ女子修道会内
TEL 03-3479-3941 E-mail：info@signis-japan.org
http://signis-japan/org/

聖母マリアの被昇天をお祝いいたします！

呼称も新たに迎えたこの祭日、今年は終戦 80 年の節目の日です。空襲・原爆・降伏で色塗られたあの年に、私たちはマリアへの追慕とともにタイムスリップし、以前以後の時代と世界を眺め渡します。戦後 80 年の間も隠然と作用し続けるあの戦争、今なお各地で多くの犠牲者を生み出している軍事侵攻……人類悪の執拗な現存を前に、それでも主に励まされて「気を落とさずに絶えず」（ルカ 18・1）祈ろうとするとき、8 月 15 日がザビエルによる日本へのキリスト教伝来の日であることを思い起こし、力にしたいと思います。この国に伝えられてきた福音の喜びと希望を、さらに伝えていくための私たちの活動が、少しでも平和を実現する力となっていきますように。

日本カトリック映画賞　授賞式＆上映会

第 49 回日本カトリック映画賞『侍タイムスリッパ―』（安田淳一監督）の授賞式・上映会および対談が 2025 年 7 月 12 日、日本教育会館一ツ橋ホール（東京都千代田区）にて行われました。今回は、コロナ禍前とほぼ同規模、700 名近いお客様をお迎えすることができました。

シグニスジャパン顧問司教である、酒井俊弘 大阪高松大司教区補佐司教に当日のご感想などをお寄せいただきました。

喜ぶ人と共に喜び……
第 49 回日本カトリック映画賞授賞式＆上映会および対談に参加して

大阪高松大司教区　酒井俊弘補佐司教

シグニスジャパン顧問司教という肩書をいただきながら、これまでこれといった貢献ができていないことを心苦しく感じております。歴史ある日本カトリック映画賞も今年で第 49 回を迎えますが、実は私が授賞式に出席したのは今回が初めてでした。特段の映画ファンとは言えず、劇場で映画を観ることも習慣ではない私にとって、むしろ第三者的な視点からこの場に臨むことができたのではないかと思っております。そのような立場からの感想を、拙文ながらまとめてみました。

今回の受賞理由について、シグニスジャパン会長・土屋至氏は表彰状の中で次のように述べられました。

「安田淳一殿、あなたが監督なさった映画『侍タイムスリッパー』は、不条理な現実を受け入れて生き抜く人間の姿を通して、人の心にある真の強さを描いた大変優れた映画です。主人公が滅私奉公の精神で守ろうとする武士の道は、私利私欲に走る現代人が見失っている『人の道』であり、人のために十字架を背負うキリストの道でもあります」

また、表彰式でのあいさつの中で、顧問司祭の晴佐久昌英神父が「今いちばん足りないものを取り戻せる希望をもらった」と語られたとき、安田監督が感極まり涙をぬぐう場面もありました。

日本カトリック映画賞が「福音的価値」を有する作品に与えられることを思えば、今回の受賞はまことにふさわしく、私自身も事前にこの映画を拝見した際、同様の思いを抱いたものでした。さらに表彰状には、安田監督について「私財を投げうってこの作品を作った監督」と記されています。いわゆるインディーズ作品、つまり大手映画会社に属さない自主制作映画であるからです。映画賞の前後に安田監督とお話をする中で、「私財を投げうった」裏話も伺いました。「どうにも資金が足りなくなったので、かつて 360 万円で購入した名車ホンダ NSX を泣く泣く売却したところ、550 万円で売れて助かりました。映画が当たったら買い戻そうと思っていたのですが、今やその車は 1200 万円もしており、諦めています」と。

授賞式当日、上映前のあいさつで、私は次のように述べました。

「映画を観る際の心がけは、聖書に書かれています。ローマの信徒への手紙 12 章 15 節、『喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい』です」。まるでそれに応えてくださったかのように、会場に集まったほとんどの方が初めてこの映画を観るにもかかわらず、小さな歓声や大きな笑いが起こり、エンディングロールが流れ始めると、割れんばかりの拍手が湧き起こりました。監督もその後の対談の中で、「クリスチャンも田舎のホール会場と同じでした」と喜びを語られていました。

個人的には、山口馬木也さん演じる主人公・高坂新左衛門の姿に強く心を打たれました。タイムスリップしてきた侍であることを語らず、それを言い訳とせず、謙虚に自分の境遇を受け入れている姿勢は、この映画を単なるチャンバラものにとどめず、不条理な現実の中でも希望を失わずに生き抜こうとする人間の強さを、静かに、しかし力強く描き出しています。なかでも印象に残っているシーンがあります。新左衛門が、斬られ役のプロ集団「剣心会」の師匠・関本と交わす会話の中で、孔子の『論語』の一節を引用する場面です。

「子曰く、疏食を飯い、水を飲み、肱を曲げてこれを枕とす。楽しみまたそのうちに在り」
これに対して関本は、続きの言葉をすらすらと語ります。「不義にして富み且つ貴きは、我に於いて浮雲の如し」
この格言は、聖書の『箴言』にある「富は鷲のように飛び去る」という言葉とも響き合います。いずれも、「富よりも正しさ、そして誠実な生き方」が尊ばれるべきであるという普遍的な価値を示しており、時代や文化を超えて通じ合う知恵に、深い感銘を受けました。

このように、私自身も観客のひとりとして、「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣く」ことのできた映画であったと思います。当日の夜、監督やスタッフの皆さんとご一緒に食事をした際、安田監督に尋ねてみました。「続編は考えておられるのですか」と。すると即座に、「撮りません。本編を越える続編はできませんから」とのご返答でした。二匹目のどじょうを狙わない、その潔さの中にも、監督の映画に対する真摯な姿勢がうかがえました。「新さん」と「優子さん」のその後が知れないのは少し残念ですが、今後も安田淳一監督が「福音的」な映画を作り続けてくださることを、心より願っています。

写真
上　表彰式、司会者と手話通訳者、PC 通訳グループ
下　安田監督を囲んで

今年も日本カトリック映画賞の授賞式＆上映会が、チケットを購入くださった方々やチケット販売にご協力くださった教会関係者、また要約筆記、手話通訳を引き受けてくださったボランティアの方々、そのほか多くの方のご支援のもと、無事に開催することができました。あらためて心からの感謝を申し上げたいと思います。

今年の授賞作『侍タイムスリッパー』は、カトリック映画賞として異色の作品と多くの方に言われます。教会やマリア様が出てくるわけでもなく、まして奇想天外な時代劇。でもこの作品には間違いなく人間のすばらしさが豊かに表現されていると思います。スクリーンの向こうに天国を感じて、会場を後にする時には少しだけ勇気をもらい、「行きましょう、主の平和のうちに」と派遣されていかれますように、そんな願いを込めてこの作品を第４９回日本カトリック映画賞として選びました。これからも神に作られた人間のすばらしさを感じることのできる作品を選びたいと思います。どうぞお楽しみに。

（映画チーム　大沼美智子）

第２回シグニス動画フェスティバル ＆ インターネットセミナー　お知らせ

①　第２回シグニス動画フェスティバル

昨年から始まった「シグニス動画フェスティバル」。日本聖書協会主催の「聖書動画コンテスト」を引き継ぎ、今年も福音的な動画作品を募集しています。

第 2 回となる今回は、カトリック教会が通常聖年を祝い、聖地や各地への巡礼が呼びかけられていることにちなんで、「旅、巡礼、希望」をテーマにします。2025 聖年公式マスコット「ルーチェ」を登場させるなど、自由かつ励みになるような作品をお送りいただければと思います。

また、今回は「4 分以内」の動画を募集しておりますので、昨年より多くのカットを入れていただくことが可能です。皆様からのご応募をお待ちしております。

②　第 28 回「教会とインターネット」セミナー

10 月 11 日（土）に「教会とインターネット」セミナーを 2 年ぶりに開催します。

これまで教会ホームページや SNS での発信など、さまざまなテーマに取り組んできたセミナーですが、インターネットでは YouTube や TikTok をはじめとする動画コンテンツが主流になり、シグニスのセミナーに求められている役割は大きく変わりつつあります。

そこでシグニスでは上述のイベントによせて、動画づくりの方法や福音的なメッセージを伝える動画はどうあるべきかを考えるセミナーを開催します。講師には、動画フェスティバルで審査員を務める映画監督の岸本景子さんをお迎えし、「『まち』と『ひと』と『映画』」をテーマに動画づくりや映画が持つ多様な可能性についてお話ししていただきます。

岸本監督からは「人生とは「旅」のよう。映画づくりもまた、「ひと」や「まち」との出逢いとともに物語を紡いでいく、巡礼の旅のようです。これまでの旅路を振り返りながら、これからその旅に出る人たちに向けてささやかな道標になりましたら幸いです」とコメントをいただいています。

今後もウェブメディアのあり方や新しい時代の変化に合わせて、このセミナーも変わっていくことと思います。「カトリック・メディア・セミナー」のようなものを目指して、より具体的な発信方法やコミュニケーションについて考えるイベントを企画してまいりますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

（インターネットチーム）

動画フェスティバル公式サイト
応募期間 2025 年 5 月 4 日（日）～11 月 30 日（日）
https://signisgoodnews.sakura.ne.jp/movie-festival/

OCIC から SIGNIS へ 50 年のあゆみに向けて（１）

来年 2026 年、SIGNIS JAPAN は、その前身である OCIC・JAPAN 創設から 50 年を迎えます。その歩みを 3 回にわたってご紹介したいと思います。

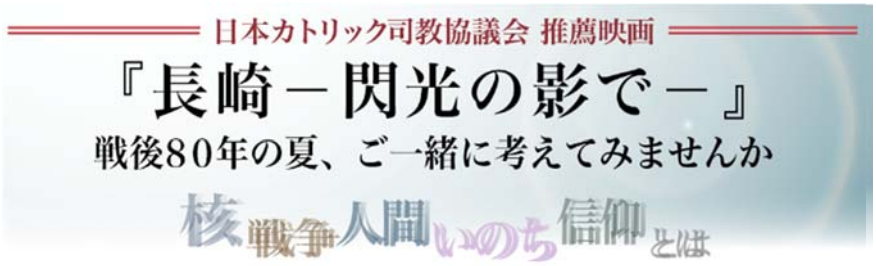
SIGNIS の歴史は、前身である OCIC と UNDA が出発点となっています。OCIC（国際カトリック映画視聴覚協議会）は、バチカンの外部組織として、映画や視聴覚メディアを通して福音を伝えるために 1928 年に設立され、日本では、1976 年 5 月 26 日に創設されました。メディアに関わる宣教をしていたイエズス会、聖パウロ修道会、聖パウロ女子修道会、神言会などの修道会や個人で活動していた司祭、信徒が参加し、年に一度総会を開いて、情報交換や親睦を深めていました。一方、UNDA（国際カトリックラジオ・テレビ協議会）は、ラジオやテレビなどを通して福音宣教している人々の集まりでした。日本では 1973 年 3 月に設立され、「心のともしび」ほかの団体・個人が参加しました。

しかし、1990 年代に入ると、インターネットが人々の生活にも浸透し、映画・ラジオ・テレビ・インターネットの境界線があいまになり領域が重なるようになりました。そこで、教皇ヨハネ・パウロ 2 世の強い意向があり、2001 年、OCIC と UNDA を統合した新しい国際カトリックメディア協議会“SIGNIS”が誕生しました。SIGNIS は「しるし」という意味のラテン語です。日本でも、OCIC が 2001 年に SIGNIS JAPAN（カトリックメディア協議会）と名称を変え今日に至っています。

さて、現在の SIGNIS JAPAN の活動の一つに、カトリック映画賞の選定があります。映画賞は、OCIC 時代から始まっていますので、来年第 50 回を迎えます。その年の邦画から作品を選んで表彰し、授賞式と上映会を行っています。第 1 回目（1976 年）の授賞作品は「土呂久」（伊藤宏一監督）で、当時四谷にあったカトリック中央協議会で授賞式を行いました。その後 20 回までは関係者のみの授賞式だけでしたが、第 21 回の「絵の中のぼくの村」から授賞式を公開とし、大きな会場を借りて授賞作品の上映会と監督の講演（対談）を行うようになりました。ちなみに「絵の中のぼくの村」は、今年 49 回の会場だった日本教育会館が会場で、たくさんの方が来てくださり満席になりました。

コロナ禍のため上映会を開催できない期間もありましたが、今年はようやく元の形を取り戻して、大勢の方と喜びを分かち合うことができました。50 年間の授賞作品を並べて見ると、社会の変動も見て取れると同時に、私たち”OCIC から SIGNIS”への歩みでもあると感慨深く思います。毎月の定例会に集まる人数は、10 数名という小さなグループですが、多くの方々の支援をいただき、50 年の歩みを続けてきました。

（次号へ続く）



被爆 80 年にあわせ、映画「長崎－閃光の影で－」が公開されます。
長崎出身で被爆 3 世の松本准平監督が、原爆投下直後の長崎で救護にあたった看護学生を描いた作品です。
カトリック信者である監督の視点から、カトリックに関する描写が随所に盛り込まれ、日本カトリック司教協議会の初の推薦作品となりました。
教皇フランシスコが紹介した「焼き場に立つ少年」のシーンや、若き看護師たちが戦争にどう向き合ったかを描くことで、現代への問いかけも含まれています。ぜひご覧ください。

1945 年・夏――
原爆が投下され、廃墟と化した街・長崎。
そこには、負傷者の救護に奔走する若き看護学生がいた。
原爆被爆者を救護した日本赤十字社の看護師たちが、
被爆から３５年後にまとめた手記「閃光の影で」を基に、脚本を執筆。
戦争の足音が近づいてくるかのような現代にあって、
核とは何か、戦争とは何か、人間とは何か、いのちとは何か、信仰とは何かを問いながら、
少女たちの苛烈な青春を描く。

（カトリック中央協議会公式サイトより）

中央協議会サイト　https://www.cbcj.catholic.jp/2025/07/15/33085/

＜映画公式サイトより抜粋＞
スタッフコメント　松本准平（監督）
被爆した亡き祖父のこと、見守り育ててくれた多くの被爆者の方々に想いを馳せながら、この映画に取り組みました。被爆の傷跡を抱え、それでも生き、平和を祈り続けてきた故郷―僕はいつか、戦争の悲惨さと原爆の残酷さ、人間の愚かさと、素晴らしさを描く映画を作りたいと念願してきました。
あの閃光の痛みも、熱線や爆風、放射能の苦しみも、全て決してわかり得ませんが、一人ひとりのキャスト・スタッフの想像力と知性、感性、そして想いに支えられました。特に、原爆に直面した人間の身心を演じる という不可能へと挑み、見事に達成してくれた菊池さん・小野さん・川床さんに心からの敬意と感謝を捧げます。
核兵器は要りません。決して人類に似つかわしくありません。80 年前のあの日を二度と繰り返さないために、世界中のあらゆる戦争が無くなることを夢見て、本作が平和への想いを繋ぐバトンの一つとなることを祈ります。

映画公式サイト　https://nagasaki-senkou-movie.jp/

会員・サポーター募集
会　員：　一緒に活動してくださる方　個人会員　6,000 円／年　団体会員　12,000 円／年
サポーター：経済的に支援してくださる方　1,000 円／口（何口でも）
★シグニスアジア会議開催のためにも、ご支援いただければ幸いです。
＜振込先＞
銀行振込：三菱 UFJ 銀行　六本木支店　（店番 045）普通 1679019　口座名：SIGNIS JAPAN 代表 土屋至
郵便振込：口座番号　00100-0-594547　口座名称　SIGNIS JAPAN　代表者　土屋至
＊他行から振込場合　銀行名　ゆうちょ銀行　店番 019 預金種目 当座　店名　〇一九店（ゼロイチキュウ店）
口座番号　0594547　口座名義　SIGNIS JAPAN　代表者　土屋至
お申し込み、お問い合わせ　女子パウロ会内　SIGNIS JAPAN
〒107-0052　東京都港区赤坂 8−12−42　/　info@signis-japan.org